

# 贈りものⅢ

YUKIKO OKADA CD/DVD-BOX

DISC 3 十月の人魚 plus

- 01. Sweet Planet
- 02. みずうみ
- 03. 花鳥図
- 04. 哀しい予感
- 05. ロンサム・シーズン
- 06. 流星の高原
- 07. Bien
- 08. ベナルティ
- 09. 十月の人魚
- 10. 水色プリンセス—水の精—

plus

- 11. Love Fair
- 12. 恋人たちのカレンダー
- 13. 二人のブルー・トレイン
- 14. 小羊NOTE



# YUKIKO OKADA

DISC 3 十月の人魚 plus





YUKIKO OKADA

DISC 3 十月の人魚





# 哀しい予感

岡田有希子

SIDE B 恋人たちのカレンダー



「哀しい予感」



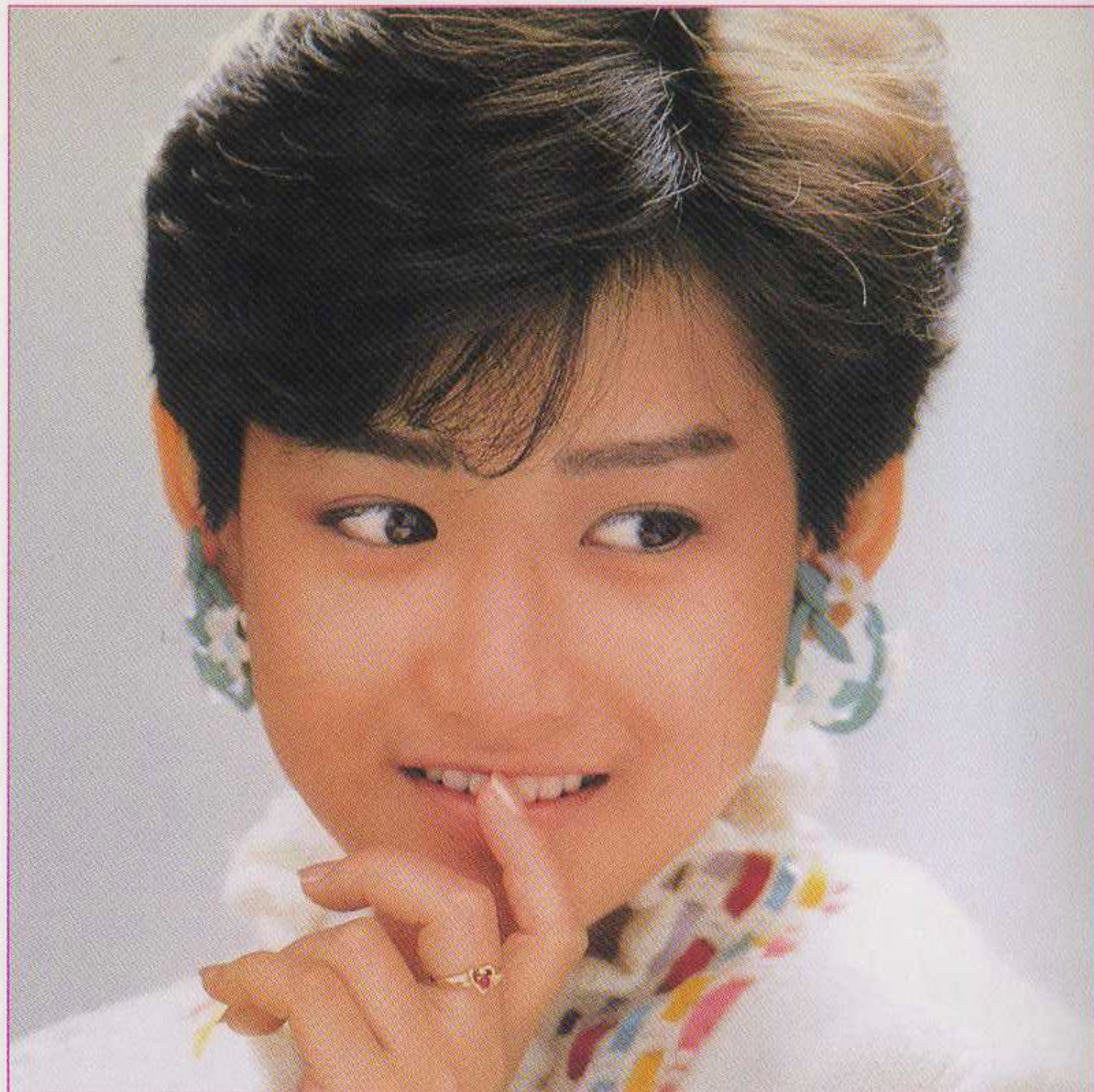


from 「哀しい予感」



「Love Fair」





from 「Love Fair」

## 贈りものⅢ

YUKIKO OKADA CD/DVD-BOX

### DISC 3 十月の人魚 *plus*

#### 01. Sweet Planet

作詞:三浦徳子/作曲:小室哲哉/編曲:松任谷正隆

#### 02. みずうみ

作詞:三浦徳子/作曲:財津和夫/編曲:松任谷正隆

#### 03. 花鳥図

作詞:高橋 修/作曲:財津和夫/編曲:松任谷正隆

#### 04. 哀しい予感

作詞・作曲:竹内まりや/編曲:松任谷正隆

#### 05. ロンサム・シーズン

作詞・作曲:竹内まりや/編曲:松任谷正隆

#### 06. 流星の高原

作詞:高橋 修/作曲・編曲:松任谷正隆

#### 07. Bien

作詞・作曲:かしぶち哲郎/編曲:松任谷正隆

#### 08. ペナルティ

作詞:竹内まりや/作曲:杉 真理/編曲:松任谷正隆

#### 09. 十月の人魚

作詞:高橋 修/作曲・編曲:松任谷正隆

#### 10. 水色プリンセス—水の精—

作詞:三浦徳子/作曲:小室哲哉/編曲:松任谷正隆

*plus*

#### 11. Love Fair

作詞・作曲:かしぶち哲郎/編曲:松任谷正隆

#### 12. 恋人たちのカレンダー

作詞・作曲:竹内まりや/編曲:松任谷正隆

#### 13. 二人のブルー・トレイン

作詞:竹内まりや/作曲:杉 真理/編曲:松任谷正隆

#### 14. 小羊NOTE

作詞:康 珍化/作曲:山川恵津子/編曲:大村雅朗



## 01. Sweet Planet

カプセルの窓越しに 森と湖の国  
ヘッドフォンささやいた メロディは  
a shooting star...

一人旅は不思議ね 二人でいる時より  
あなたのこといっぱい感じてる  
sweet feeling

今頃 青く光る髪なびかせ  
水晶のような瞳で  
何を見つめているのかしら

ちょっぴり私のことなど思って  
夜空を見上げてくれたら  
愛に気づくかもね...

ひざの上に広げた ピンクのwater colour  
スケッチは下手ですが あなたへのlove letter

一億光年さえ 飛び越えてるわ二人  
遠く離れるほどに きらめくの  
sweet planet

今頃 あなたはどこにもいないの  
アドレスを消して 宇宙へ  
誰も知らない星へ ランディング

ちょっぴり意地悪したいと思って  
ハートをワープさせたの  
けれど逆効果ね...

流れ星にのせるわ ピンクのwater colour  
何を書いても愛ね あなたへのlove letter

## 02. みずうみ

水色のプレスレット  
ふいにくれた 波打際  
日に灼けた あなたの指  
宙を切り ポケットへ

過ぎる夏に 熱い想い  
そこで時がただ止まっているわ  
湖 きらめいて こぼれ出す

誰より好きと 心が揺れる  
Dream in Dream  
あなたへ...

岸边へと 腰をおろし  
名前だけ言われた時

映画のよう 沈黙だけ  
かけ抜けては空 青く染めたわ  
湖 忘れない 今日の日を

ふり向かないで 涙が揺れる  
Dream in Dream  
あなたへ...

誰より好きと 心が揺れる  
Dream in Dream  
この夏

ふり向かないで 涙が揺れる  
Dream in Dream  
あなたへ...

## 03. 花鳥図

トランプ模様のドア  
そっと覗いてみると  
薄紫の霞が  
けむる秘密の花園

二人で迷い込んだの  
陽暮れの泉のほとり  
瑠璃色の風にさらわれて  
気が遠くなる様な 花の香り

気付いた時に二人は  
異次元 時間のすき間  
夢の国 旅する手品師の  
気まぐれなマジックなの

色鮮やかな孔雀  
木陰 散歩している  
白い衣の乙女達  
空で踊る桃源境

手と手を つなぎあったら  
さあゆこう 不思議な冒険  
二人して秘密をつくろうか  
あなたは 聞こえないふり

物語りの様に  
白い馬を走らせ  
花の森へ消えてく  
夢の国の異邦人

## 04. 哀しい予感

お願いよ ほんとのこと 打ち明けてほしい  
眠れない 夜が続き  
哀しい予感に 揺れてる私

2度目の夏が過ぎた頃  
あなたは 突然 変わったの  
電話の声も 少し冷たい

不安な気持ちのまま 飛び出して来たけれど  
好きよ 好きよ こんなにも好きよ

お願いよ うわさなんか 嘘だと言ってね  
私だけ 愛してると 誓った言葉を  
信じたいから

心と心 離れたら  
友達でさえもいられない  
なんて淋しい 季節の始まり

明日からこの道も あの子と歩くのでしょうか  
風に散った 私の初恋

お願いよ せめて家に たどり着くまでは  
つなされた 指と指を はなさないでいて  
泣きそうだから...

明日からこの道も あの子と歩くのでしょうか  
風に散った 私の初恋

お願いよ せめて家に たどり着くまでは  
つなされた 指と指を はなさないでいて  
泣きそうだから...



## 05. ロンサム・シーズン

それはいつも はしゃぎ過ぎた  
季節のあとにやってくる

頬と頬よせ 歩いた砂浜  
足あとを消す 白い波も  
今はただの 思い出なの  
私の胸に残るだけ

さよなら さよなら あの瞳  
くちづけさえ交さず 失った恋  
ああ せつなさに ああ あふれる涙  
あなたのせいなの I still love you

小さな嘘が 二人をへだてた  
秘密だらけの あなたのことを  
知れば知るほど 遠くなるの  
ほんとは誰かを愛してた

さよなら さよなら もう二度と  
顔合わせることさえ ない人だけど  
ああ 懐しく ああ よみがえるのよ  
今でも心は I still love you

さよなら さよなら あの瞳  
くちづけさえ交さず 失った恋  
ああ せつなさに ああ あふれる涙  
あなたのせいなの I still love you  
今でも心は I still love you  
あなたのせいなの I still love you

## 06. 流星の高原

二人の胸に 星のかけら  
飛びこんできて 火を灯してゆく  
空が近すぎて…  
“あなたの腕が肩にかかる”  
そんな予感に 走り出している私を許して  
おこらないで

冷たい風が熱い頬 冷してゆくわ 怖いよ…  
青い夜空と銀の星 初めてのKiss… 瞬間が  
うそ 本当は待ってた 出会いの日からずっと  
だけど勇気が出ないから

二人の影を水に映し  
見つめ合ってる そのやさしい笑顔  
やっぱり素敵  
揺れる舟から 手をのばして  
岸辺の花を摘みながら作る白い飾り  
二人のエンゲージ

あなたの声が山びこで 「好き」と何度も言っている  
次は私の番だけど ただ うつむいて聞いていた…  
うそ 本当は小さな声で 「好き」とつぶやいた  
聞こえたかしら 心配よ

あなたと出会った あの雨の夜  
泣いていたの  
訳さえ聞かず 傘をさしかけ  
ただ黙って歩いてくれたね

あの日のように肩ならべ 白樺の道 歩いてる  
私の気持ち どのくらい知っているのかわからない  
けど 何も怖くない あなただけ信じるわ  
逃げだしたりは もうしない

透き通ってる二人の 高原からの絵はがき  
森の香りを届けるよ

## 07. Bien

Bien 不思議な  
Bien メロディー  
貴方の唇に咲いた  
甘くてシャレたシャンソン 素敵ね

Bien キスして  
Bien いいのよ  
貴方のバラ色のシャツに  
頬寄せ 私のルージュがとけるわ

Non Non Pridel  
抱きしめて  
まわりを気にしないで  
Non Non Stop!  
愛して ふたりのセゾン…

Bien ゆらめく  
Bien プール・サイド  
貴方は軽やかにステップ  
水辺に映るブロンズの恋人

Bien 見つめて  
Bien いいのよ  
夏風 私をくすぐる  
秘かに 花咲くロマンス あげるわ

Non Non Pridel  
受けとめて  
心をはだかにして  
Non Non Stop!  
愛して ふたりのセゾン…

## 08. ペナルティ

泣き出しそうな グレイの空  
動き始めたワイパー  
言い訳さえ 見つからずに  
カーラジオだけが 唄う

My darling, my darling, 許して  
あの日 彼と出かけた  
一度だけのあやまち  
もう 何もきかないで

愛を試す 女の子の  
本音はいつでもジェラシー  
あなたのこと こんなにまで  
傷つけたのは ペナルティ

My darling, my darling, 許して  
黙り込んだ 横顔  
涙こぼれる頬に  
もう キスしてくれない

時を戻すためなら 何でもするけれど  
あなたの笑顔 もう二度と帰らないの

My darling, my darling, 許して  
雨の音に消された  
愛の言葉 信じて  
Please love me again

My darling, my darling, 許して  
あの日 彼と出かけた  
一度だけのあやまち  
Please hold me again

My darling, my darling, 許して  
黙り込んだ横顔  
涙こぼれる頬に  
Please kiss me again



## 09. 十月の人魚

青い月の海で 銀の髪の人魚  
遠い空を見ている 波にゆられて  
真珠色の泪 頬に飾っている  
泣き疲れて眠る 白い貝の船

濡れた瞳 夢の中で輝いている  
二人で泳ぐ 真夏の海 眩しいくらい  
憧れている この胸のときめきはもう  
届かないのかしら

幾つも流れ星 人魚の空 過ぎる  
願い事はいつでも あなたの事を  
潮騒の溜息 くちびるからこぼれ  
船乗り達の胸は 切なくなるの

青い月の 海にシルエット しぶきをあげて  
夏を追いかけ ジャンプしてる 人魚がいるの  
悲しい声は もう誰にも届かない  
秋の海からは

ごめんね  
ごめんねマーメイド もう十月 風も冷たい  
夏の季節は 遠い国へ 旅に出たのよ  
追いつけないわ もう十月 海も冷たい  
ごめんねマーメイド もう十月 風も冷たい

## 10. 水色プリンセス—水の精—

Love… 恋は突然なの  
月の夜 秘密の砂浜  
Kiss… なぜか 哀しそうな  
あなたの瞳 胸刺した  
Love… 街が寝静まれば  
一人 抜け出して踊るわ  
Kiss… 夢を見るあなたの  
まつげ くちづけするために…

水色プリンセス 願いは一度  
永遠見るために すべてを賭ける  
ハンブティ ダンプティ…教えて  
please 次のページ 開く勇氣  
この私に下さい  
please 忘れかけた なぞの呪文  
この私に下さい

Love… 銀の星の雫  
てのひら 集めたネックレス  
Kiss… 髪に飾ったなら  
二人 結ばれるでしょうか  
Love… 遠い海の彼方  
素敵な舞踏会にどうぞ  
夢を見るあなたの  
夢なら もうさめないはずよ

水色プリンセス 願いは一つ  
心が通うなら すべてを賭ける  
ハンブティ ダンプティ…教えて  
please 次のページ 開く勇氣  
この私に下さい  
please 忘れかけた なぞの呪文  
この私に下さい

please 愛を奪う 赤い靴を  
この私に下さい  
please 恋におちる天使の矢を  
この私に下さい

La la la la la la …

## 11. Love Fair

Love Fair 花束をそえて  
Secrets 貴方のお部屋に  
Love Fair 私のすべてを  
Secrets そっと届けるわ

花びら擠みとる いけない子  
やめて No No No…  
不思議な電波を放つのは  
誰れの瞳?

さぁ 熱いラブ・フェア  
Now 甘いキュートライン  
さぁ 恋はハリー・アップ  
あなた 誘惑ドリーマー…

Love Fair 何も隠さずに  
Secrets まってすぐ行くわ  
Love Fair 私のまごころ  
Secrets きつく抱きしめて

時々 ハードに責めてくる  
ダメよ No No No…  
身体のバランス 失って  
少し め・ま・い

さぁ 熱いラブ・フェア  
Now 私はレディ  
さぁ 恋はライト・アップ  
あなた 誘惑ドリーマー

Love Fair 花束をそえて  
Secrets 貴方のお部屋に  
Love Fair 私のすべてを  
Secrets そっと届けるわ

## 12. 恋人たちのカレンダー

Monday 初めてあなたと出会って  
Tuesday 見えるものすべて輝き  
これが恋だと ときめいたの  
私もうひとりぼっちじゃない

Wednesday 初めて電話をもらって  
Thursday 好きよと手紙に書いたの  
あなたのために 髪も変えた  
私 大人びて見えるでしょ

So tell me why, my sweet heart  
I feel like crying when I'm alone  
And hold me tight my sweet heart  
Even though it's just in a dream

Friday デイトの約束交して  
Saturday あなたの車でドライブ  
雨に降られて ひき返した  
その途中で 初めてのキッス

Sunday 明日もあなたに会いたい  
Calendar めくるたび 想いつのらせ  
ふたり素敵な恋人ね  
あなたといつか 結ばれ  
あなたといつか 結ばれ  
あなたといつか 結ばれたい…



### 13. 二人のブルー・トレイン

約束通りにやって来たホームは  
人影さえ 少なく  
ポストン手にした あなたのあとから  
顔をふせて 歩いたの

さあ これから 初めての旅  
もうあとには引き返せない  
私達を乗せた ブルー・ブルー・トレイン  
夜の都会に手を振った

時計を見ながら あの娘のおうちへ  
ママが電話する頃ね  
秘密を抱えた 心が痛むわ  
だけど うまく 嘘ついて!

二人だけの初めての旅  
誰にも内緒の一日  
恋とスリル乗せた ブルー・ブルー・トレイン  
夜明けまで 少し眠るわ

やがて汽車の窓の外には  
深い緑に抱かれ  
朝もやにかすむ湖  
近づいて見えてくる  
もうすぐ駅ね

降り立つホームに漂う空気が  
彼の息を白くする  
ひとつのコートを仲良くわけ合う  
二人乗せて走るよ  
二人乗せて走るブルー・トレイン

### 14. 小羊NOTE

信じたまま瞳とじる My Love  
そんな場面 いつも夢に見る  
でも なんにも 言ってくれない  
まだ やさしさが 返事

電話じゃダメ 会いたいのと My Boy  
呼び出しても どうしたのと聞く  
つき合ってから もう半年  
ねえ ただのいくじなし

ココにあなた 触ってほしい  
とじこめてる せつなさに  
女の子は しん気楼よ  
ゆるる時がさめる時  
気がついて

胸の中にトゲが刺さる My Love  
あなたのキス それが薬なの  
迷う気持ち 誘うように  
ねえ 空が たそがれる

ここまできて さよならなら  
悲しすぎて 帰れない  
同世代の愛し方は  
知っているはずよ あなた  
抱きしめて

ココにあなた 触ってほしい  
恋をしてる せつなさに  
女の子は しん気楼よ  
ゆるる時が さめる時  
ちがついて

### DIRECTOR'S INTERVIEW

株式会社ポニーキャニオン  
取締役

## 渡辺有三

—まず最初に渡辺さんが岡田有希子さんと出逢って担当ディレクターになった頃の話をお聞かせください。彼女が「スター誕生!」に出場したのは御覧になったんですか?

「いや、それは憶えてないですね。「スター誕生!」出身ということも忘れかけていました。あの頃のことで一番憶えているのは、ポニーキャニオンとサンミュージックさんがはじめて本格的に仕事をすることのプレッシャーですね。うちの会社の方が問われるわけだし、当時は、メーカーのディレクターの責任が100%でしたからね」

—松田聖子さんとくらべられる心配とか?

「それもあったでしょうね。ただ、当時、サンミュージックは松田聖子さんが活躍していて、早見優さんもいましたよね。僕は、早見優さんがすごく好きだったんですよ、筒美京平さんの曲を歌ってたり—で、聖子さんはまた独自のお洒落なポップスを歌っていて・・・そういう良質のポップスを手掛けるというキャラク

ターの事務所と仕事ができるということで、僕とはすごく合いそうな気はしました。これは直感ですけど」  
—歌手としての有希子さんをどうみていましたか?

「やっぱり声質ですよ。百万ドルの声質だと思いましたね、最初から。耳障りがよくて、スピーカーのボリュームを大きくしてもうるさく聴こえない—そういう声質がすごくよかったです。僕は、アイドルでも顔がどうのっていうより雰囲気の方が大切だと思ってるんですが、そこには声の要素が大きいんです。彼女は、キーが低いのもよかったですね。お金になるんです(笑)。僕の考えでは、女の子の低い声と男の人の高い声が一番お金になる。そういう意味も含めて、彼女の声にホレたというのはありましたね。それはよく憶えています」

—具体的な方向性に関してはどういう考えだったんでしょう?

「最初から、既存のいわゆる作家の先生に頼むってことは頭になかったと思います。デビューまでには何回も会議を重ねて意見のすり合わせをしていくんですけど、その席で「曲はどうなってます?」って聞かれても僕は最後まで答えなかった憶えがあります。ふつうはデモテープを途中で聴かせたりするんですけど、あの時はある程度形を作ってから聴かせようと思い、「もう少し時間ください」って言い続けました。

なんでそうしたかは憶えてないんですけど」

—慎重にことを運びたかった?

「と、うか・・・最初から僕の頭の中に岡田有希子さんのイメージがピシッと出来上がっていたわけじゃなくて、何回か会ったりしてるうちにだんだんコンセプトが固まってきたものですから、その途中の、自分でもぼや—っとしか見えてない段階でああだこうだ言えなかったってことでしょうね。だから、自分の中ではっきりとイメージが固まった時に作品として聴いていただくと考えたんだと思います」

—やはり、それだけ大きいプロジェクトだったということですね。

「是が非でも—っていうタレントですからね。ポニーキャニオンというポップスが得意なレコードメーカーと、サンミュージックという勢いに乗っている事務所がはじめて組んでやりましょうってところに日本テレビも絡んでいて・・・ハズせないですよ。「仕組みは完璧、あとは作品だよ」って言われているようなものですから」

—その中で、渡辺さんはどんな作品を作ろうと考えたんでしょうか?

「岡田有希子さんの個性をどう確立させるかってことをいつも考えていたんですが・・・彼女には妖精的なイメージ、メルヘンチックなイメージがあるってことは最初から頭の中にありましたね。それから、



彼女はまだ若かったでしょう？ だから、学生でなくちゃ味わえない青春の甘酸っぱさ・・・ポップス版の学園ものっていうか・・・そういうニオイも入れられないかなとか、いろんなことがありました。そんなことをズーッと考え倦ねてたのがさっき話した時期なんですね。それがどこかでピントが合って竹内まりやさんの登場に繋がるんです。まりやさんとは堀ちえみちゃんですすでに繋がりはあるし、その時とはまた違うテイストを岡田有希子ちゃんに書いてもらいたいというアイデアが浮かんできたんですよ。この時のことで今でも憶えてるのは、まりやさんに有希子ちゃんをプレゼンするために、アーティスト写真をもものすごく大きいサイズに焼いてトレーシング・ペーパーまでつけて、有希子ちゃんのいいところを全部書いた手紙を添えて届けたんです。その後、2週間ぐらい経って「なんて素晴らしい可愛い子なんでしょう。やれるかどうかわかりませんが、トライしてみます」という返事をいただいて。多分、そのプレゼンの仕方もよかったんじゃないでしょうか。直接お会いしてああでこうでって喋るのは当たり前過ぎるので、静的な手紙という手段でアプローチしたということですよけどね」

「いえ、まりやさんの曲を待つか

たわら、ほかの方たちにも同じコンセプトでお願いしていました。ただ、コンセプトの伝えかたというのはそれぞれの方のキャラクターに応じて変えていましたね。ある人には“スクールカラーを強く”って言ったり、ほかの人には“妖精——フェアリーっぽいイメージ”を強く伝えたり、いろんな話し方をしたと思います。そういうのは得意でしたから。そうやって、ちょっとずつ変えてもらったものを歌ってもらって最終的に決定する——デビュー曲ってそんなものですよ。申し訳ないけどコンペですよ。1曲必中でやるってことはまずなかったんです」

「それで、結局「ファースト・デイト」がデビュー曲に決まったわけですね。

「そうです。でも、その時点でセカンド・シングル「リトル プリンセス」もできていたんです。よく憶えてますよ。大好きな曲ですから。あと、最終的にアルバムとかB面にまわった曲もこの時点でけっこうできていたんですよ。つまり、それだけグレイドの高い曲が集まっていたってことです」

「渡辺さんから見て、まりやさんのソングライターとしての魅力はどこにあったんでしょう？」

「日本人が好きなテイスト——歌謡曲チックなものを、うまくポップスの中に融合させている人ですよ。それも頭で作ってるんじゃない

で、ハートとか心の琴線を震わせながら作ってる感じの独特のメロディ・ライン。詞と曲を同時に作る人じゃなければああいうふうにはならないでしょうね。有希子ちゃんに関して、本当にすごくいい作品をいただいたと思ってますよ」

「ところで、まりやさんがはじめて書いたアイドル系の曲は、堀ちえみさんの「待ちぼうけ」(1982年8月発売)で、それを依頼したのが渡辺さんですよ。でも、それ以前のまりやさんって自分のシングルでもあまり自作の曲は歌ってなかったんじゃないですか。渡辺さんはどこで彼女のソングライターとしての資質を見抜いたんですか？」

「それは多分、当時の僕のカンでしょうね。いい作品を作ってくれそうだっていう。じゃないと、恐くて何もできないですよ。中島みゆきさんに「MUGO・ん…色っぽい」(※工藤静香/1988年8月発売)を書いてもらったり、チャゲ&飛鳥に「STAR LIGHT」(※光GENJI/1987年8月発売)を頼んだ時も「なんてことやらせるんだ」と言われたけど、僕はそういうことってお互いにプラスになると思ってるんです。みゆきさんもチャゲアスも自分達だけじゃ絶対やらない世界でしょう？ そこにテーマを与えて「こういう曲をお願いします」と頼めば、彼らのほうも冒険できるわけですよ。頼んでいるのはこっちだから彼

らにリスクはないですしね」

「でも、「ファースト・デイト」をデビュー曲にしたのは正解でしたよね。有希子さんのルックスやイメージから、デビュー曲はもっとキャピキャピ系の曲調かと思いきや、ちょっと暗めの曲が出てきた意外性がインパクトになっていますし。」

「暗い歌ですよ、たしかに。実は「ファースト・デイト」の原曲は全然違ってたんですよ。あれに関しては萩田光雄さんのアレンジも大きかったんです。完璧なアレンジでしたね。萩田さんってたくさんアレンジの仕事をやってらっしゃるけど、これが最高傑作じゃないかなと僕は思っているんです。今聴いても天才の仕事だなと思いますよ」

「ジャケットも特殊な仕様になっていましたよね。紙が厚くてLPのジャケットみたいなタイプで・・・。」

「後ろに切れ目が入っていて、切り離すとスタンドになるんですよ。あれも僕が考えたんです。自分で山野楽器に買いに行った時に店員さんに「これ、スタンドになってるんですよ。よくやりますよねえ」なんて言われましたよ(笑)。あのジャケットは貴重ですよ。初回出荷分だけの仕様でしたから」

「そして、その後3枚目のシングルまでまりやさんの作品が続くわけですが・・・。」

「歌手のイメージを確立するために何作か同じカラーのものを続

けるっていうのが僕のやり方でしたから。そうすることによってやっとイメージが定着するんですよ。だから、この時も、「ファースト・デイト」から始まって、まりやさんの同じ系統の作品を3作は続けようっていうのは最初から決めていました」

「でも、「リトル プリンセス」では、前作の萩田さんから大村雅朗さんにアレンジ者が変わってますね。」

「そのへんは同時進行ですから。「この曲は萩田さん、こっちは大村さん」という風に割り振ったんだと思います。ひとりがいっぺんにはできませんから」

「この頃の有希子さんの曲イメージって、明るすぎないってことがポイントだった気がするんです。はかないというか・・・。」

「ああ、「切ない」というのは僕のコンセプトにありました。切ない感じのアーティスト・イメージ、それと“行き過ぎない”ということ。それはズーッと作品に出ているんじゃないですか？」

「曲を重ねるごとに明るくなっていく感じが巧妙ですよ。3枚目の「恋、はじめまして」あたりはかなり明るくなってますけど、いかにもファンが「待ってました」と言いたくなるような曲調だし、うまく流れができていと思うんです。」

「こういう曲をボンと入れると効くんですよ。岩崎良美さんでいうと「涼風」みたいな。暗めの曲の

間に入れるとファンがホッとしますよ」

「そして、次のシングルが尾崎亜美さんの「二人だけのセレモニー」ですね。ここからアレンジは松任谷正隆さんに代わってますが、この路線はやはり、それまでの路線を踏まえつつ新しい側面を見せていこうという狙いと考えていいですか？」

「そうですね。僕の常套手段ですが、一見似たような振りをして、実は違うんだってところを出すには、別の個性のある人に頼まないダメなんですよ。というのも、前の曲が成功すればするほど、その次に頼む人はその影響を受けちゃうんです。「前の曲とは変えてくれ」と言っても、どうしても前の曲を引き継いじゃうんですよ。そうすると、「そんなに気を遣わないで下さい。これじゃ前の人と同じニオイですよ」みたいな言い方でダメ出しをしなければいけない。でも、亜美さんとまりやさんなら全然違いますから。一見、女性でシンガーソングライターでっていうことで同じ括りに見えますけど、僕からみたら全然違う肌合いのソングライターですからね。その2人に同じコンセプトを話せば、どこか脈絡は流れるけれど、違う引き出しで書いてくれますからちょうどいいものができるんです。そうすれば、似ちゃうとか、前の路線を引き継いじゃうっていう心配はないですよ。それで、亜美



さんという個性の強い人をお願いしようと考えたんだと思います。もちろん、亜美さんだけではないですけどね。やっぱり、同時にいろいろな作家の方をお願いしてるはずですから」

—セカンドアルバム『FAIRY』のライター陣を見ても、さらに幅広いタイプの作家が名を列ねていますね。

「そうですね。最初にまりやさんなんかにお話した“スクール・カラー”とか“切ない感じ”、そして“妖精—Fairy”に近付けていこうっていうマスタープランを継承しつつ、新しい人たちに作品を書いてもらえば面白いなど思っている方をお願いしたんです。でも、いわゆる歌謡作家の方たちというのはほとんどいないでしょう？」

—ええ。むしろ、ニューミュージックというか洋楽寄りのポップス志向が強いですね。アレンジの松任谷さんもそこには貢献してると思うんですが、渡辺さんが彼を起用するにあたって期待していたことはなんですか？

「やっぱり品のよさでしょう。だって、岡田有希子さんってお嬢さんっぽいところがあって、それが彼女のよさでもあるわけですから、音楽にもそれを反映させるべきです。そう考えたら、やっぱり、ちょっとリッチ感覚の品のよい人っていえば、当時松任谷さんが一番でした

から」

—そして、その『FAIRY』というアルバムで、タイトル通り、初期の有希子さんの妖精的なイメージが頂点を極めたという印象がありますが。

「そうです。このアルバムが、最初に話した妖精的ってことの集大成なんです。だから、ここで僕が最初に狙ってたものには到達してるってことですよ。ただ、ホントはこういうタイトルは好きじゃないんです。だって、「私はFAIRYよ」っていったらもうイメージ膨らまないじゃないですか。聴いた人に「これ、妖精っぽいアルバムだね」って言ってもらえるのがベストなので、こういうタイトルはつけちゃいけないんです。これは現在の僕自身の反省ですね。コンセプトをそのままタイトルにしちゃうほど間抜けなものはないですから」

—そのあとのシングル「哀しい予感」はまた竹内まりや作品ですね。ここでまりやさんに戻ったのはなぜですか？

「今言ったように『FAIRY』でひとつの集大成を作ってしまったので、その二オイを消すために、もう1回まりやさんの曲でリセットかけたんですね。次に別のところに行くにしても、行かないにしても、とりあえずここで1回リセットという。これも僕のいつもの手なんです(笑)」

—そして、次のアルバムが「十月の人魚」ですね。

「これは『FAIRY』が進化したものです。だから、この2枚のアルバムは親戚なんです。内容はもちろん変わっていますが、あくまでも僕の中の“妖精っぽい”というイメージの進化形なんです。つまり、「哀しい予感」でリセットはしたもののもう1回その路線に行ってるってことですね」

—ここでは小室哲哉さんも登場して2曲書いていますね。まだ彼が作曲家としても、TM NETWORKとしてもブレイクするずっと前のことですが。

「ああ、そうですね。ここでもう登場してるんですね。この当時、すでに彼の才能を認めていたってことでしょ。でも、小室さん作曲で松任谷さん編曲なんて、これが最初で最後なんじゃないですか？(笑)」

—こういう新しい作家を次々と起用してくれるところが、邦楽通からすると渡辺ディレクターの魅力なんですけど、そのためには新進アーティストの作品も含めて相当量の音楽を聴いていたんでしょうね。

「もちろん、いつもいろんな人を聴いてましたね。でも、自分と波長の合う人ってそうそういるわけじゃないから。「この人がどうしていいんですか？」って聞かれても、「自分と波長が合うから」ってことしか

ないんですよ」

—「Love Fair」を作詞作曲したかしぶち哲郎さんも意外な人選だったんですが。

「そうですね。彼、すごくいいですよ。発売されなかった最後のシングル「花のイマージュ」もかしぶちさんでしょう？」

—そもそもは、ムーンライダーズの流れでかしぶちさんとおつきあいするようになったんですか？

「そうですね。当時、僕のアシスタントについていた飯島さんの影響ですね。彼女がムーンライダーズの事務所と親しかったこともあり、かしぶちさんを推薦してくれて、僕も彼にホレてお願いすることになったように記憶してます」

—その後、かしぶちさんは松任谷さんに代わって有希子さんのアレンジを全面的に担当することになるんですよ。

「そうですね。アルバム『ヴィーナス誕生』とか・・・このアルバムになると、前の路線とは全く変わってきていますよね。作家の顔ぶれを見ても、EPO、大貫妙子、坂本龍一とか、昔のRCA～ミディのレコードみたいですね(笑)。大体、坂本龍一さんに岡田有希子の歌は行きませんよね、ふつうは(笑)。でも、僕はホントにミディ系のアーティストたちが大好きだったんですよ」

—それにしても、タイトルこそ“ヴィーナス”という神話的なイメージを

残しているものの、ムードはここであらりと変わりましたよね。この時はコンセプト自体変えてしまおうという狙いがあったんでしょうか？

「いえ、違います。これはもう「くちびるNetwork」ありきでしょう。あの曲は、話題作りも含めて、有希子ちゃんをもうひとつ盛り上げるためのカンフル剤という感じで、坂本さんとSeiko(松田聖子)さんをお願いして作ったんです。その流れでアルバムもと「ヴィーナス誕生」を作ったんだと思います」

—実際、「くちびる～」は大変話題を呼びましたね。ふつうじゃ考えられない顔合わせですから当然かもしれませんが。

「そうですね(笑)。今でも憶えてますけど、この時、バインダーの1ページにひと言ずつこちらの要望を書いて聖子さんにお渡ししたんです。「とりあえず、読んで下さい」って。聖子さんは「じゃあ、これを毎日机の上において見ながら詞を書きます」って言うてくれて。そうじゃないと詞って書けないんですよ。お任せっていうのはプロデューサーとして一番ずるいことだから、僕は1回もしたことはないんです。この時はカネボウのCMで使われる曲だから、カネボウからもイメージを聞いてたし、それを踏まえてどう作るかって考えてたことを全部書いて持って行ったんですよ」

—そして、アレンジがかしぶちさん

・・・。

「この頃、僕がかしぶちさんのことを非常に買っていたんでしょ。だから、彼でいきますって言うっちゃったんじゃないかな。多分、坂本さんに聞いたらいろんな意見が出てくるだろうし・・・だから、もう、この人でいきますって決めちゃったんだと思います」

—結果は岡田有希子さんにとって唯一のナンバー1ヒットになりましたね。

「ああ、最初で最後ですか。それも彼女らしいですね。人気があったにもかかわらずナンバー1ヒットがあまりないっていうのも。でも、本当に聖子さんにも坂本さんにも頼んでよかったと思いますよ。おかげで結果が出ましたから」

—この曲で1位を獲ってやる!という思いはなかったですか？

「いや、それはないでしょう。この頃っておニャン子全盛で、毎週彼女たちが交代で1位を獲っていた時代ですからね」

—そして、「ヴィーナス誕生」が「くちびる～」を踏まえた次のステップだったわけですね。

「そうだと思います。このへんのことにはよく覚えていないんですけど。でも、たしかに変わってますよね。大人っぽくなったというか。・・・ただ、この次に何をやるかが難しいんですよ。有希子さんはここで亡くなってたわけですけど、このあ



とずっとやれていわれたらかなり難しいと思います」

—当時、ここから先のビジョンは渡辺さんの中にあったんですか？

「あったと思います。ただ、憶えていないですね。僕は自分から進んで命を断った人に関しては触れないようにしていましたから。意識して忘れるようにしたんです。彼女に関するインタビューにも僕はいっさい応えていないですね。その後、ベスト・アルバムを出してくれという要望もいっぱいありましたけど、十年間やっていないんです。自ら死んだ人をそっとしておいてあげたいという思いがあったものですから」

—発売が決定していた「花のイメージ」も結局リリースされなかったんですよね。

「あの曲はすごくいい曲だったので、出してくれっていう嘆願書がたくさん来たんですよ。ちゃんと僕の手元に届いていましたので、全部読みました。でも、今言った理由でそっとしてあげてほしかったので、あえて出さなかったんです」

—今、こうして岡田有希子さんのことを振り返って、感じるのはどんなことでしょうか？

「最初に話した“はかない”とか“切ない”っていうコンセプトが、その後のことを考えると妙にリアリティがあるんですね。「哀しい予感」っていうタイトルについてもい

ろいろ言われましたし。そういう、美人薄命じゃないですけど、線の弱いイメージと、実際に短命に終わったっていうことが僕の中で結びついちゃって、自分が切ない気持ちになってしまうんですよ。こうやって明るく喋っていても、どこかで寂しい終わりかただったなって思えてしまって……。やっぱり、ああいう形で早く世を去ってしまったことのインパクトってのはかりしれないですよ」



「贈りものII」





from「贈りものⅡ」

〈取り扱い上のご注意〉ディスクは両面共、指紋、汚れ、キズ等を付けないように取り扱って下さい。／ディスクが汚れたときは、メガネふきのような柔らかい布で内周から外周に向かって放射状に軽くふき取って下さい。レコード用クリーナーや溶剤等は使用しないで下さい。／ディスクは両面共、鉛筆、ボールペン、油性ペン等で文字や絵を書いたり、シール等を貼付しないで下さい。／ひび割れや変形、又は接着剤等で補修したディスクは、危険ですから絶対に使用しないで下さい。〈保管上のご注意〉直射日光の当たる場所や、高温・多湿の場所には保管しないで下さい。／ディスクは使用后、元のケースに入れて保管して下さい。／プラスチックケースの上に重いものを置いたり、落としたりすると、ケースが破損し、ケガをすることがあります。